

学びと社会とをつなげるキャリア教育実践の在り方

— 家庭・地域・企業等と連携した授業を通して —

《研究の概要》

本研究は、子供一人一人の社会的・職業的自立に向け、必要な基盤となる能力や態度を育むために、学校と家庭や地域、企業等との連携を通して実社会とつながった学習活動を展開することが有効であるかを検証したものである。本市キャリア教育の実態を調べると、学校と外部が連携するためのシステムが整っておらず、授業が学校内で完結しているケースが多かった。このため社会で役立つ資質・能力の育成が十分行われているとは言えないと考えた。そこで、目的を明確にして外部と連携するモデル授業をデザインし、その教育的効果を探った。その結果、現実世界で直面する問題に対応できる、真正性のある資質・能力の育成につながるということがわかった。

1 問題の所在

近年、主体性をもち、よりよい社会を創る担い手となる人材の育成が求められている。一方で、本市では「地域や社会をよくするために何かしてみたい」という子供の意識が全国平均と比べて低いという課題が指摘されている¹。

本市ではこれまでキャリア教育の実践が展開されてきたものの、家庭・地域・企業等（以下「外部」と略す）との連携を重視した授業が十分に行われているとは言えない。その結果、学びが学校内で完結しがちであり、子供たちが学んでいることと社会とのつながりを実感する機会が少なくなっていると考えられる。

文部科学省（2022）は、「地域や社会と関わり、様々な職業に出会い、社会的・職業的自立に向けた、学びを積み重ねていくこと」²で、学校と学校外との連携によって質の高い教育を実現する必要があると述べている。千葉市（2024）も、「一人ひとりのキャリア発達を促進するためには、学校だけでなく外部（家庭、地域、企業等）からの組織的・体系的な働きかけが不可欠である」³とし、キャリア教育における「横の連携」を重視している。このような状況を踏まえ、本市キャリア教育について、現状を把握し、学校と外部との連携の視点から実践について改めて見つめ直す必要がある。そして本市一人一人の子供たちが学校での学びと社会とを結び付けることができる、キャリア教育実践の在り方を追究することが肝要であると考えられる。

2 研究の目的と方法

(1) 研究の目的

本市におけるキャリア教育の現状を把握し、外部と連携した授業実践を通じて、子供が学校での学びと社会とのつながりを実感できるキャリア教育の具体的な方法とその効果を明らかにする。

(2) 研究の方法

本研究は、学びと社会とをつなげるキャリア教育実践を追究するため、以下の手順で進めることとする。

- ①本市教職員及び子供のキャリア教育に関する意識の実態を把握する。その分析結果と先行研究を踏まえ、本市キャリア教育の課題を明らかにする。
- ②文献研究及び授業研究を行い、授業モデルを設計し実践する。
- ③実践後、教師（研究協力員）にインタビュー調査を行い、結果を分析する。それを踏まえ、効果的なキャリア教育を実践するためのポイントを整理し、提案する。

3 研究内容

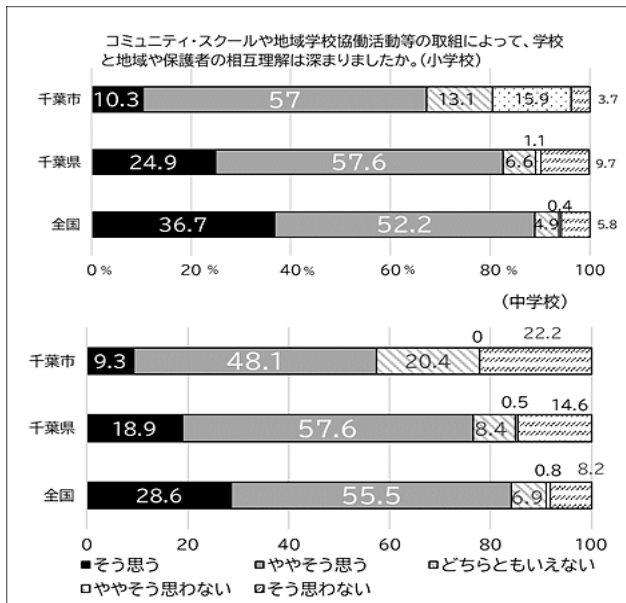
(1) 千葉市学校教育の実態

①学校と外部との連携に対する現状

文部科学省（2024）が示したデータによると、本市におけるコミュニティスクール（以下「CS」と略す）の導入率は0.6%（全国平均52.3%）、地域学校協働本部（以下：協働本部）の整備率は44.4%（全国平均61.0%）となっており、全国平均や他の政令市の平均に比べて低い割合となっている⁴。令和6年度全国学力・学習状

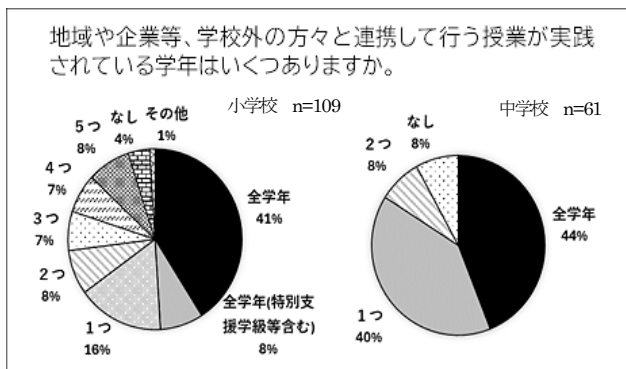
況調査の学校質問調査における結果からも、外部と連携した授業が行われにくくなっていることがうかがえる。

CSや協働本部の効果についての質問項目（[図1]）では、「相互理解が深まった」に対して「そう思う」と答えた割合が小・中学校共に全国平均を大きく下回っている。



[図1] 令和6年度全国学力・学習状況調査 学校質問調査

本市では、学校が地域社会と連携して教育活動を行うための組織づくりが途上にあると言える。外部と連携した授業の実施状況について、市内小中学校へ質問調査を行った結果が[図2]である。



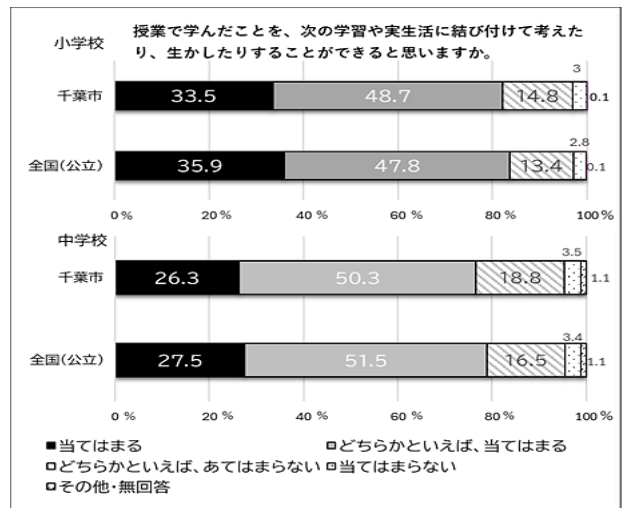
[図2] 市内小中学校 教職員に対する質問調査

「地域や企業等、学校外の方々と連携して行う授業が実践されている学年はいくつありますか」という問いに対して、全学年で実施していない学校の割合が小学校は54%、中学校は75%であった。特に中学校では、

「1つ（の学年）」と回答した割合が40%と最も多く、市内の半数近くの中学校では3学年のうち1学年でしか外部と連携した授業が実践されていないことがわかった。

②本市の子供の実態から

令和6年度全国学力・学習状況調査における子供の意識調査を一部抜粋して[図3]に示した。



[図3] 令和6年度全国学力・学習状況調査 意識調査

「授業で学んだことを、次の学習や実生活に結び付けて考えたり、生かしたりできると思いますか」の項目で「当てはまる」と回答した割合は、小学校では全国平均より2.4ポイント、中学校では1.2ポイント低かった。このことから、日々の学びが次の学習や実生活と結び付いていないと考える子供が多い傾向にあることがわかる。

③教師の実態

教師に対して、基礎的・汎用的能力を身に付けた子供の姿について、インタビュー調査を行った。結果の一部を[表1]に示した。

[表1] 6月時点の教師の見取り（一部抜粋）

基礎的・汎用的能力	主な見取りの内容
自己理解・自己管理能力	・けんかをしたとき、その場で謝ることができた。 ・忘れ物に自分なりの方法で対処できた。
人間関係形成・社会形成能力	・友達を気遣う声かけができた。 ・互いの失敗を笑って許すことができた。
課題対応能力	・音楽発表会の反省点を挙げる事ができた。 ・休み時間に学習について質問をすることができた。
キャリアプランニング能力	・係活動で自分の役割を果たすことができた。 ・欠席した友達の役割を進んで引き受けることができた。

学校生活における様々な姿が基礎的・汎用的能力と照らして見取られていることがわかる一方、「作業を分担して行った」や「友達を気遣う様子が見られた」等、学習内容とは関連しておらず、基礎的・汎用的能力というよりは、学校や学級の規範を規準にして見取っていると感じられる姿も散見された。これらのことから、教師が基礎的・汎用的能力を身に付けたかどうかを見取る際には、学習内容を基にしておらず、単に学校の中だけで通用するようなものにだけ向く傾向があると言える。そのため、学習活動で子供たちが社会とつながるような資質・能力について、具体的な子供の姿を明確にすることができていないと考えられる。

④本市キャリア教育の課題

これまでの①から③の結果から、本市の学校現場では、外部と連携する意義や価値を見いだしておらず、そのことが外部と連携した授業の実施率の低さに影響しているのではないかと考えられる。つまり、授業が学校内で完結しても何ら問題はなく、日々の学びと社会とが繋がっている必要性を教職員があまり感じていないと思われる。

(2) モデル授業の実践

(1) で述べた結果を踏まえ、[表2] に示すような教科で外部と連携したモデル授業を設計し、その結果を考察した。

[表2] 実践された教科等と外部の連携先

教科等	連携先や体験活動
小学校 家庭科	自然だし専門メーカー、消費者センター
中学校 理科	地域の総合病院に勤める薬剤師

①【目的】基礎的・汎用的能力と学習のねらいをつなげる。

ア 学年、教科及び単元名・連携先

小学5年 家庭科「食べて元気に」・自然だしメーカーの方(以下：外部講師)による訪問授業

イ 手立て ルーブリックの作成と活用

基礎的・汎用的能力と学習で育成をねらう資質・能力とを結び付けた実践を行うため、教師と共にルーブリックの作成を行った([表3])。作成にあたっては学習指導要領を参照し、家庭科学習として育成を目指す資

質・能力について教師が理解することや、その資質・能力を身に付けた子供の姿を言語化することに時間をかけた。その上で本学習において育成を目指す資質・能力と関連する基礎的・汎用的能力は何かについて検討した。本単元では、「課題対応能力」の育成を重点として実践することとした。

[表3] 家庭科の資質・能力と基礎的・汎用的能力との関連について検討して作成したルーブリック

評価	内容
A	味噌汁にだしを入れることで風味が増すことに気付き、学校での調理や家族が食べて元気になる味噌汁づくりの計画、今後の食生活に生かそうとしている。
B	味噌汁にだしを入れることで風味が増すことに気付き、学校での調理や家族が食べて元気になる味噌汁づくりの計画に生かそうとしている。
C	味噌汁にだしを入れても風味が増すことに気付かず、学校での調理や家族が食べて元気になる味噌汁づくりの計画に生かそうとしていない。

ウ 授業の実際と教師の変容

授業では、3種類のだしについて飲み比べを行うなど、だしについて体験的に学ぶだけでなく、味覚に関する知識や、うまみの効果等について、



[資料1] うまみの効果や味覚について学ぶ様子

外部講師ならではの授業構成により食に対する専門的な知識を得ることができた([資料1])。

そして、この後に展開する「オリジナルの味噌汁を家族に作る」という活動への子供の意欲が増した。このような子供の姿に対して、ルーブリックを活用して評価を行った。23名の子供のうち、A評価とした子供は9名、B評価とした子供は14名、C評価とした子供は0名であった。授業後の子供の振り返りについて、評価ごとの子供の記述を[資料2]に示す。

A評価とした子供の記述
<ul style="list-style-type: none"> ・だしを入れるとうま味が引き出せるから、味噌などの調味料が少なくてもおいしいみそ汁が作れて、健康になれることがわかった。 ・4つのだしを組み合わせると、自分や家族の好みにぴったりのおいしいみそ汁を作りたい。 ・だしが野菜のうま味を引き出すことを初めて知った。弟は野菜が苦手だから、そんな弟でも食べやすいみそ汁を作りたい。
B評価とした子供の記述
<ul style="list-style-type: none"> ・だしを少し入れただけで、料理の味は大きく変わることがわかった。 ・まだ飲んだことのないくらい、おいしい味噌汁が作れそう。 ・だしを組み合わせるとうま味が6倍に7倍にもなることを初めて知った。 ・粉末だしをなめるとしょっぱいけれど、昆布やかつお、煮干しでとっただしは、味が薄いけれど香りが強い。

[資料2] 振り返りにおける子供の記述と評価(一部抜粋)

授業を通して専門家から深く学ぶことで、だしが生み出す効果について体験的に理解した子供たちは、今後の学習活動をよりよいものにしていけるという期待感を得ることができていた。これにより、次の活動に生かそうとする意欲が高まり、課題対応能力へとつながる姿が見られた。一方、子供の記述から仕事や働くことに関する内容は見られず、本実践においては学習内容と社会とが繋がっているという実感を子供が得られたかどうかについては、検討の余地が残された。このことから、外部と連携をすることに加え、学習内容と社会とをつなげる手立てが必要であると考えられる。

②【目的】実社会の文脈を通して学ぶ。

ア 学年、教科及び単元名・連携先

小学5年 家庭科「生活を支えるお金ともの」・消費生活センターによる消費者教育

イ 手立て 消費生活センターの相談事例の活用

本単元では、育成を目指す家庭科学習の資質・能力を「消費者として『購入に必要な情報を活用し』『選び方を考え、工夫できる』ようになること」とした。これは、「子供が実生活の課題を捉え、解決に向けて行動できる」という点で、課題対応能力と関連すると考えた。学習内容と社会とが繋がっていることを子供が実感できるようにするため、消費生活センターで相談業務を受ける立場の方と連携し、実際に寄せられる相談事例を扱うこととした（[資料3]）。

事例
同じ商品でも値段が違うことに後から気付いた。返品できるか？
未成年が成人であるとうそをついてゲームに課金したところ高額請求がきた。取り消してほしい。
商品が安かったため1度だけ購入したつもりだったが翌月も送られてきた。返品して解約したい。
アプリで購入した商品が届かなかった。返金してほしい。

[資料3] 授業で扱った実際の相談事例

ウ 授業の実際

消費者教育を通して、モノやサービスを買う際には何を考え、判断する必要があるのかについて、相談事例を活用しながら、子供



[資料4] 相談事例を基に考える

たちは現実の問題について外部講師と共に検討を行った（[資料4]）。

本実践により、子供たちは自分自身の消費生活に関する行動を振り返り、今後の消費者としての在り方について考えることができた。授業後に教師に対してインタビュー調査を実施し、授業で見られた子供の姿について聞き取り、実践前後で見取りの内容を比較した（[表4]）。

[表4] 聞き取った見取りの内容と実践前後の比較（一部抜粋）

基礎的・汎用的能力	6月(実践前)の見取り	11月(実践後)の見取り
人間関係・社会形成能力	話し合いで友達への考えも尊重しながら自分の考えを述べる事ができた。	・ 学習内容を家族に伝え、注意喚起をした。 ・身に付けた 消費者としての知識を単元終末の買い物計画で活用 していた。
自己理解・自己管理能力	月目標の振り返りの際に、自分に足りなかったことを考え、振り返ることができた。	・ 社会科の自動車産業の学習の際、売買契約から発注までの流れを発見 し、発言した。
課題対応能力	給食の時間に自主的に声を掛け合い、お代わりを進めていた。	・ 算数の単位量当たりの計算の際、「商品を買うときは、裏の表示までしっかり見ない」と 発言した。
キャリアプランニング能力	家庭科の 玉結び・玉どめ・縫い取りを使って靴下を直したい とつづやっていた。	

「学習内容を家族に伝え、(消費者として気を付けるべきことについて) 注意喚起をした」という姿は、消費者トラブルを現実の課題として捉えたからこそ起こした行動であると言える。これは、学習内容と社会とが繋がっていることを子供が実感したことを示している。また、本時で学んだことを社会科や算数といった他教科に結び付け、よりよい問題解決に生かそうとする姿も見られた。これらは、課題対応能力の育成にもつながる姿であると考えられる。

外部とつながり、実際の社会の文脈を通して学ぶ授業を展開したことで起きた教師自身の変容等について、インタビュー調査を行った。その結果を分類し、要旨を[資料5]に示す。

<p>【実践を行って感じた自己の変容】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・教師自身が外部の人とつながることで、家庭科学習と社会とが繋がっている実感をもつことができた。それにより、単元を通して学習内容を社会とのつながりを意識して構成できた。 ・「どう教えるか」から「学んだことを子供がどう使っているか」に意識が向くようになった。 ・家庭科の学習内容を社会科で話題にした子供の発言を聞いて、教科横断的な視点が得られた。
<p>【実践上の難しさ】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・基礎的・汎用的能力について、いくら教室で学んでも、それを子供が活用できたかまで見取らないと、育成されたかどうかはわからない。学習計画の工夫が必要。 ・全ての学習内容がキャリア教育と結び付くわけではないと感じた。実施する単元を検討する際には、教科横断的な視点も大切になる。

[資料5] 教師による振り返り（一部抜粋）

教師が「家庭科と社会とがつながっている実感」をもったことで、子供も社会とのつながりを実感できるような単元構成を行ったり、教科等横断的な視点を子供がもったことに気付いたりすることができた。外部とつながることや、子供の姿から新たな視点を獲得する、つまり「子供から学ぶ」ことを通して、教師の学習観が変容していることがわかった。また、「どう教えるか」から「学んだことを子供がどう使っているか」に意識が向いたり、学んだことを活用する場面を設定する必要があることに気付いたりもしている。これは、カリキュラム・マネジメントを行いながら、一単位時間ではなく、中長期的、教科等横断的に育成していく資質・能力と、基礎的・汎用的能力の育成に対する考え方が合致していると捉えることができ、今後のキャリア教育実践に関する重要な示唆であるといえる。

③【目的】職業に関する体験活動を授業に組み入れる。

ア 学年、教科及び単元名・連携先

中学2年 理科「化学変化と原子・分子」・学区の総合病院で働く薬剤師

イ 手立て 仕事に関する体験的な活動

本単元では、物質の変化や原子・分子に関する概念の理解にとどまらず、知識と科学的な根拠とを結び付けて考えることができる資質・能力の育成を目指した。身近な薬を扱う仕事の側面から学ぶことで、薬の扱いは原子・分子の特性と結びついていることを実感できるようにした。その際、薬剤師が行っている業務の体験をしたり、実際の器具等に触れたりすることで、体験的に学べるよう授業を設計した。学習内容と仕事とを結びつけることで、子供が今後の生活や将来について考えることができ、キャリアプランニング能力と関連すると考えた。

ウ 授業の実際と教師の変容

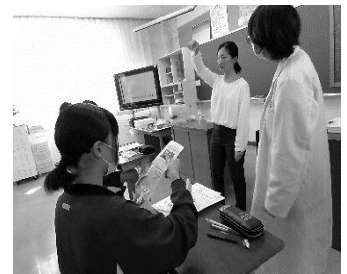
本時では、外部講師が作成した架空の処方箋と薬の説明書を読み比べて間違いを探したり、実際の器具に触れたりしながら、薬剤師はそれらを普段どのように扱い、どのようなことに留意して仕事をしているのか

を知る活動を行った。本実践後の子供たちの振り返りについて、[資料6]に一部抜粋して示す。

<p>【学習内容の深まりについて】</p> <ul style="list-style-type: none"> 化学は、実験だけではなく色々なところで使われているんだなと改めて思った。 「薬も原子なんだ。」と感じた。その気付きにより、改めて薬の危険性もわかった。 授業前は元素や分子などの知識しかなかったが、授業を受けてから薬への関心が高まり、知識が増えた。
<p>【職業について】</p> <ul style="list-style-type: none"> 処方箋を受け取る時に聞かれるのは病院と連携を行っていないからだと思っていたが、危険性がないように確認してくれていたんだな、と思い嬉しかった。責任が大きい仕事だが、やりがいがありそうだなと思った。 薬局での処方だけでなく病院や様々なところでも働いていることを知った。一人一人に合った薬を処方するために、たくさんの人が関わり、長い時間をかけて丁寧に扱ってくださっているということがわかった。
<p>【その他感想】</p> <ul style="list-style-type: none"> 今まで知らなかった薬剤師の仕事を知ることができ、貴重な時間となった。実際に薬品などにも触れて、薬剤師という職業に興味を湧かせた。実際の体験談なども聞くことができ、改めて、将来について考えようと思える授業になった。 今まで薬剤師さんの仕事はあまり詳しく知らなかったが、人の命に関わる職業ということで責任は重くなるし、一つのミスも許されない仕事だということが分かった。 薬を規定の数以上飲む理由について、今回の学習で原子と分子が要因だということが分かり二年生の前期で学習したことを活かすことが出来て面白かった。

[資料6]質問項目と子供による振り返り(一部抜粋)

『薬も原子なんだ』と感じた」「前期で学習したことを生かすことができ面白かった」などの記述から、これまで学んできた化学の知識が薬の使い方にもどのような影響を与え、効能や副作用にもどのように関わっているのかを理解し、学習と実生活のつながりを実感することができ、学習意欲が高まったことがうかがえる。また、薬剤師から話を聞き、仕事のやりがいや大変さについて学ぶことで、薬剤師という職業が抱える現実的な側面の認識も深めていたこともうかがえる。将来の職業選択において現実的な視点をもつことは重要であると言える。実際に薬剤師から話を聞いたり、仕事の一部を体験したりすることで([資料7])、子供の職業に対する意識が変容していることがわかる。



[資料7]器具の取り扱い方を教わる様子

授業実践と子供たちの振り返りを踏まえ、教師にインタビューを行った。その内容の一部について [資料8] に示す。

【実践を行って感じた自己の変容】

- ・外部とつながることは難しいことだと考えていたけれど、**一歩踏み出せば協力してもらえる**ことがわかった。外部の方々も、**学校教育に関わるメリットを感じてくださっている**こともわかった。
- ・人の生き方や考え方に触れる授業を行うことで、子供は**自発的に自己の将来や今後の進路について考え始める**ことに気付いた。
- ・(教師自身の)尊敬できる職業人との**出会い**が、信頼関係と**よりよい授業実践につながる**と気付いた。

【実践上の難しさ】

- ・最初に連絡を入れる際の**心理的ハードルが高い**。
- ・単発の実践にならないよう、今後につなげていくこと。**学校の理解と計画性**が重要である。
- ・自分自身が**学習内容について深く理解しておかないと**、外部との打ち合わせの際にうまく伝えることができないことを実感した。

【資料8】教師による報告（一部抜粋）

本単元は、理科で育成を目指す資質・能力と、基礎的・汎用的能力の関連を図り、学習を充実させるために教師が外部との連携を模索したことから実現した。このように、教師が専門性を生かして自ら主体的に行動することは「教師エージェンシー」(OECD 2015)⁵の発揮と呼ばれ、子供の学びを深め、主体的に学ぶ姿勢を育むうえで重要とされている。教師自身がエージェンシーを発揮し、外部講師の生き方や考え方に触れることのできる授業を展開したことで、子供が自発的に将来や進路について考え始めたことは、[資料7]に示した子供の振り返りからも示されていると言える。

4 研究のまとめ

(1) 成果

モデル授業を行った教師の変容や子供の姿から、外部と連携した授業におけるキャリア教育実践の効果について、[資料9]の四つにまとめた。特にイからエは、本研究の講師である藤川教授が重要と言われる「真正

性」という視点と重なる。育成すべき資質・能力は、社会における本物の課題解決や、仕事等を通じた実社会の文脈の中で発揮できるものに意味がある。それゆえ、授業において実社会の文脈を取り入れることは、基礎的・汎用的能力を育成するうえで重要であることがわかった。

- ア 専門的な知識に触れることで、子供の学習内容に対する理解が深まり、学習意欲が高まる。
- イ 子供が学習内容と社会とがつながっていることを実感でき、学んだことを次の学習や他教科等領域、日々の生活に生かそうとする姿勢が育まれる。
- ウ 子供が外部の大人と出会い、働き方や生き方、職業について知ること、自己の将来について考え始めるきっかけとなる。
- エ 子供が実社会の文脈と関連付けながら学ぶことができ、社会で役立つ基礎的・汎用的能力の育成につながる可能性が高まる。

【資料9】キャリア教育実践の効果

(2) 課題

本研究で行われた実践は1単位時間のモデル授業であり、基礎的・汎用的能力が確実に育成されたかは明確ではない。今後は教科横断的な視点で単元をつくり、カリキュラム・マネジメントを行いながら実践を積み重ねると共に、学んだことを子供が活用する場面を設定する必要もある。その際、外部と「連携する授業」をより発展させ、子供と外部の人とが「関わり合う授業」を展開する等、実社会の文脈で学ぶ「真正性」を重視した実践の在り方も考えていきたい。

【研究組織】

○通年講師	千葉大学教育学部	教授	藤川 大祐		
○研究協力員	千葉市立本町小学校	教諭	岡本 美咲	千葉市立横戸小学校	教諭 齋藤 伊織
	千葉市立大森小学校	教諭	高崎 晃成	千葉市立泉谷小学校	教諭 間藤 冬樹
	千葉市立坂月小学校	教諭	佐藤 心平	千葉市立更科中学校	教諭 木村 恭子
	千葉市立鶴沢小学校	教諭	茂木 聡	千葉市立川戸中学校	教諭 宇都 貴裕
	千葉市立小倉小学校	教諭	上村 京		
○所内担当	教育研究・総務班	元吉 佑樹 (担当)		金子 礼明	若松 諭 小倉 直子

【主な引用/参考文献等】

- 1 千葉市教育委員会 (2023) 『第3次千葉市学校教育推進計画』
- 2 文部科学省 (2022) 『小学校キャリア教育の手引き』
- 3 千葉市教育委員会 (2024) 『未来を拓くキャリア教育』
- 4 文部科学省 (2024) 『令和6年度コミュニティ・スクール及び地域学校協働活動実施状況調査の結果 (概要)』
https://www.mext.go.jp/content/20241105-mxt_chisui02-000038660_3.pdf (2025. 2. 18 参照)
- 5 OECD (2015) 『OECD Education 2030』

千葉市教育センター 研究紀要第33号

- 研究名：キャリア教育に関する研究 ○研究対象：小・中・中等教育・特別支援学校
- 研究領域：キャリア教育 ○研究内容キーワード：キャリア教育、外部連携、真正性